

ヤコブ5章1～11節「耐え忍んだ人の幸い」

私たちの生活はいつどうなるか分からないのだから与えられている時間を大事にしよう、というようなことは一般でも言われることです。私たちキリスト者は、それに加えて、キリストが再臨されることを知っています。その時にはさばきが行われ、キリストにある者は天の御国に入ることができ、救いを完成していただけることを教えられています。その時に向かって私たちは生きることができます。

1. 金持ちへの警告（：1～6）

1節。キリスト者も未信者も含めた「金持ちたち」に対して語っているようです。4節からすると、ユダヤ人の地主たちで、所有している畑からの儲けだけを考えているような者たちだったようです。さらに、富の問題は裕福な人だけの問題ではないので、教会のすべての兄弟姉妹にも「よく聞」いて欲しいということでしょう。実際、富の問題は持っている財産が多い少ないに関係なく誰でも捕らわれやすく、食りにつながりやすいものです。ですから、富に対する警告は誰もが自分のこととして聞かなければなりません。

まず語られているのは、「迫り来る自分たちの不幸を思って、泣き叫びなさい」という警告です。単に地上的な苦しみではなく、神がさばきの日に彼らに下す罪の宣告と刑罰であるということです。

主イエスは富の危険性について多く語っています。ルカ6章では、平地の説教と呼ばれる箇所最初において、貧しい人たちは幸いだと語り、反対に富んでいる者たちは哀れだと宣言します（ルカ6：24～25）。

裕福な者たちが責められている場合は、富の間違った用い方が原因です。ヤコブがここで語っている警告も同じです。富自体が悪なのではありません。金持ちたちの間違った態度が問題なのです。

ヤコブはここで四つの間違った態度を挙げています。一つ目は金持ちたちが滅びるものを蓄えていることです。2～3節。「富は腐り」、「衣は虫に食われ」、「金銀はさびて」といいます（完了形）。やがて来る「終わりの日」には滅びることが確かなので、それがすでに今起こっているかのように語ります。富、衣、金銀が今の世では豊かさや祝福を与えているようであっても、神のさばきに際しては何の意味もありません。それらを豊かに持っていて、神のさばきに対しては希望を与えないのです。

むしろ、富は持つ人に罪の判決をもたらします。「あなたがたの肉を火のように食い尽くします」。滅びをもたらすのです。その理由について主イエスはお語りになりました。ルカ12章33～34節。滅びの理由は、彼らが天に宝を積むことを考えず、地上の宝を蓄えることだけに一生懸命ということです。そのことは、彼らの「心」がどこにあるかを示しています。また、彼らは富を自分のために蓄えるばかりで、施しに用いないからです。それゆえに、彼らには滅びが待っています。

金持ちたちの間違いの二つ目は、雇っている労働者から賃金を搾取していることです。4節。当時の農園では日雇いの労働者が多くいたようです。一日の労働の終わりに賃金が支払われました。このことは律法の中で命じられていたことです（申命記24：14～15）。賃金が支払われないなら、貧しい人はいのちの危険にさらされることになったのでしょう。貧しい人のことを顧みない金持ちの罪責を主は正しくさばかれるのです。

金持ちたちの間違いの三つ目は、彼らが利己的で、他の人の必要を顧みることなく、「ぜいたくに暮らし」ていることです。5節。主イエスがなされた話、ある金持ちとその家の門前に寝ていたラザロの話を思い起こします。二人とも死にましたが、金持ちがよみで苦しみながら目を上げると、遠くにアブラハムとその懐にいるラザロが見えました。金持ちは苦しみの中で助けを求めますが、アブラハムは言います。「おまえは生きている間、良いものを受け、ラザロは生きている間、悪いものを受けた。しかし今は、彼はここで慰められ、おまえは苦しみもだえている」。そのように、さばきの日が来ることを考えず、自分の楽しみのためだけに富を使っていることに対する刑罰が語られています。

金持ちたちの間違いの四つ目は「正しい人を不義に定めて殺し」たということです。貧しい人に分け与えなかったり、労働者への賃金を払わなかったりする者が実際にいたことを指しているのでしょう。それでも、「彼はあなたがたに抵抗しません」。金持ちたちの力が強いので、抵抗できないのでしょう。

持っているものが多い少ないに関わらず、私たちもこれらのみことばに聞かなければなりません。自分のために一切用いてはならないということではありません。主が与えてくださる祝福を喜び楽しむことは良いことです。しかし、人のことを考え、人の必要に配慮することを見失ってははいけません。そして、宝のあ

るところに心があることを覚えて、主を愛し、自分と同じように隣人を愛する「心」、そして天を目指す「心」を失うことがないようにしたいと教えられます。

2. 苦難の中での忍耐（：7～11）

次に、苦しめられている者たちに対して次にヤコブは語ります。7節。「金持ちたち」のように人々を苦しめる者がいても、神はその者たちを必ず罰するのですから、その時まで耐え忍ぶようにと励まします。その時とは「主が来られる時」です。主キリストの再臨を表しています。

教会はその初めから、天に昇られたキリストがやがて再び戻って来られることを信じて、期待していました。その時まで耐え忍ぶことを農夫のことにたとえて説明します。「初めの雨」は初秋に降る雨のことで、それまで硬かった土地がその雨によって柔らかくなります。農夫はそれを待って土地を耕し、種を蒔きます。「後の雨」は初夏に降る雨のことで、その雨によって実りが豊かになります。農夫はそれを待って収穫します。神がそれらの雨を降らせてくださり、「貴重な実り」を与えてくださることを期待して、農夫は耐え忍んで働きます。

そのようにキリスト者たちはキリストの再臨を待ち望み、耐え忍びます。8節。たとえ罪や困難な状況に苦しむことがあっても、主が来られる時を待ち、耐え忍び、心を強くしているようにと励まします。主が来られて、悪者を裁き、ご自分の民を救い出してくださるからです。

その時が「近づいているから」と言います。主が来られるのは私たちの時代かもしれないのです。いつかは分かりませんが、主が来られる時が近づいているのですから、私たちも耐え忍び、心を強くしているようにと教えられます。

そしてヤコブは、耐え忍ぶ上で注意すべきことを取り上げます。9節。苦難の中で陥りやすい罪は、人に対して文句を言うことです。主が来られる時が近いことは、悪者に対するさばきを期待すると共に、自分自身の態度を顧みるようにとの促しでもあります。「さばきを行う方が戸口のところに立っておられます」。今にもその方が扉を叩こうとしています。その時に私たちは扉を開けて、主をお迎えする準備ができていますでしょうか。

ヤコブはもう一度、耐え忍ぶことを励まします。苦難の中で忍耐した例として、預言者たちとヨブのことを取り上げます。10節。預言者たちは「主の御名によって語った」ために苦難に遭いました。しかし、主のこぼを受け取った者はそれを語らずにはいられないのです。

11節。「耐え忍んだ人たちは幸い」であることをヤコブは確信し、兄弟たちに伝えたいと思っています。主イエスも山上の説教で言われました。「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」（マタイ5：10）。この主イエスの教えをヤコブは思い起こしていたでしょう。「幸い」とは、私たちが言う「幸せ」とは違います。「幸せ」とは大抵の場合、主観的で情緒的な感情です。しかし、「幸い」とは客観的な事実であり、神から与えられる報いがあることです。

ヨブは自分に非があったわけではないのに、ひどい苦難に遭います。しかし、それでもヨブは神から離れないで、忍耐しました。その彼に主がなさった結末をユダヤ人たちも私たちも知っています。「主によるその結末」からも分かるように、「主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられます」。すべての人が地上の生涯の中で神からの報いを受けられるというわけではありません。しかし、神のお取り扱いはこの地上のことだけではありません。神は永遠において治めておられ、永遠の祝福を約束してくださっているのです。

ですから、私たちは、苦難の中で主に訴え、慈愛とあわれみに満ちた主が与えてくださる報いを期待し、忍耐することができるのです。

終わりの日に何の意味もないものを蓄えるのではなく、天に宝を積むことを意識しましょう。困っている人々のために用いること、人々の必要に配慮することを見失うことがないように注意しましょう。主を愛し、自分と同じように隣人を愛する心、そして天を目指す心を持ち続けましょう。

また、この世では苦難を経験することがありますが、私たちキリスト者は主が来られて、実りを与えてくださる時を待ち望み、耐え忍びます。その時が近づいているのですから、心を強くしていただけるように祈りましょう。そして、聖書から私たちは主による結末を知っているのですから、慈愛とあわれみに満ちておられる主を信頼して、苦難の中でも忍耐できるように祈りましょう。